

長畝ふるさと通信

【2016年2月号】

■ 南国の楽園「バリ島」へ行ってきました

2月7日～13日、インドネシアのバリ島へ行ってきました。バリ島には「カンムリシロムク」というバリ島にしか生息しない絶滅危惧種の鳥（佐渡のトキのようなもの）がいて、その主な生息地である西バリ国立公園のレンジャー（日本で言えば環境省みたいな）の方々が2014年から佐渡を訪問し、視察・交流をしていました。その際にボクもトキと共生する農業について説明し、懇親会の席上で酔った勢いで「近い将来、必ずバリ島へ行きます！」と約束してしまったのでした。右2014年の交流会（佐渡トキ交流会館にて）



■ バリ島ってこんなところ

ジャワ島の東に浮かぶバリ島は面積5,633km²（佐渡の6.6倍）、人口約420万人（佐渡のなんと66倍）。一年を通じてあまり気温の変化はなく（平均24度）、雨季（10～3月）と乾季（4～9月）があります。主な産業は稲作を中心とした農業と世界的リゾート地としての観光業です。島民の90%がヒンズー教を信仰しており、各家には「家



の寺」なるものがありました。朝・昼・晩には必ず家の玄関先などに「チャナン」と呼ばれるお供え物を欠かしません。通貨は「ルピア（Rp）」といい、1万円が約100万ルピアとなり、両替すると何だかお金持ちになった気分が味わえます。スーパーで売られる食料品は日本より安めで、衣料品や雑貨類は日本とほぼ変わらない印象を持ちました。左写真がカンムリシロムク。

■ 西バリ国立公園

バリ島の最西端にその国立公園があります。島の中でも大自然が多く残され、海岸に繁茂するマングローブ林には実に多様な野鳥や動物たちが暮らしています。一方で居住区や海岸線にはビニールゴミが散乱し、深刻な問題となっていました。ギリマヌク村では住民自治によるゴミ集積処分所などが出来てはいましたが、住民のゴミに対する意識はまだまだ低いとのことでした。「みんな綺麗なおとこに住みたいと思っているのに・・・」と地元

住民は残念そうにつぶやくのでした。

島の中でも特に貧困層が多いとされるスンプルクランポック村では、トウモロコシと養豚で生計を営む農家や、自宅でカンムリシロムクを民間繁殖する農家を尋ねました。彼等はとにかく陽気で話し好き。ついつい時間がオーバーしてしまいます。「何にもないけど水でもどうぞ」とカップ入りの水を差し入れてくれたのが印象的でした。

■ 孤児院も慰問

ブリンピンサリ村はバリ島でも珍しい、キリスト教徒が密林を開拓し移住した村で、ヤシの密林の中に整地された居住区と田んぼが広がっています。その一角にある「ウィデア・アシ孤児院」には6～15歳の孤児達が集団生活をしており、ボクたちをバリ島の伝統音楽「ガムラン演奏」で歓待してくれました。人なつっこい目をしてなつてくる子供達を見ると思わず日本へ連れて帰りたい衝動が……。運営資金が乏しいと聞けば、有り金全部寄付したいという衝動が……。お別れの「さよなら～、さよなら～」の歌声に思わず目頭が熱くなるおじさんでありました。



■ 世界文化遺産の棚田

今回のツアーで一番楽しみしにしていたジャティルイの棚田は2012年、ユネスコの世界文化遺産に選ばれました。あいにく雨季真っ最中で土砂降り、絶景を堪能する事はできませんでしたが、その雰囲気は十分に伝わってきました。バリ島に1000年以上も続く「スバック」と呼ばれる伝統的水利システムが現代も引き継がれ、この景観が維持されているそうです。ツアーガイドの話ではバリ島で一般に作付けされる「タイ米」は栽培期



間5ヶ月で二期作、110円/kg。この棚田で作付けしている「バリ米」は単粒種で栽培期間10ヶ月、年一作で280円/kgとのことでした。ここにも高付加価値ブランド米がありました。世界中から観光客が訪れるランチテラスで飲むビールはまた格別でありました。

■ ウブドの夜

ツアー最終日の夜、ウブドという街でどうしても見ておきたかった「ケチャダンス」を見に行きました。エキゾチックなムード漂う古い寺院の広場で、30人ほどの上半身裸のおっさん達の大合唱に始まり、バリ美人の独特な表情や仕草は圧巻でした。観光客用にアレンジしてあるとのことでしたが、本物の迫力は（ユーチューブで見た映像に比べて）満点でした。思わず惚れてしまいそうに・・・



■ ガルンガンに想う

バリ島滞在期間中は丁度ヒンズー教徒の「ガルンガン」と呼ばれる迎えお盆の最中で、どこの家にも「ペンジョール」と呼ばれる竹竿が飾られ、島民は帰省ラッシュ。誰もが家族揃って正装し、地元の寺院へ参詣、豚の丸焼きなどのごちそうを振る舞うのだとか。まさに日本のお盆の風習に似ています。各地で見たお祭りやお葬式もそこで暮らす人々の「つながり」の強さを強く感じました。経済的な豊かさと引き替えに地域のコミュニティが希薄化した日本にとって、人間が生きていく上で大切なものをあらためて実感した旅でもありました。今回のツアーは地方県議の視察研修的な要素が強いものでしたが、次回訪れるときはリゾート気分を満喫できる旅にしたいと想います。「老後は南の島でのんびりと暮らしたい」。そんな夢を見ながら雪のちらつく佐渡へと帰って参りました。

